

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370143

研究課題名(和文) 菅原精造が初めて伝えた日本漆芸が近代のフランス美術に及ぼした影響の位置づけ

研究課題名(英文) The Influences of Japanese lacquer artist Seizo Sugawara on Modern Art of France

研究代表者

川上 比奈子 (kawakami, hinako)

摂南大学・理工学部・教授

研究者番号：90535121

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：漆芸家・菅原精造について、遺族、関連文献・史料を調査した結果、次の事実が明らかになった。1) 菅原の漆芸技術の習得は、圓山卯吉が創設し運営した山形県酒田市の教育機関兼事業所「カワセ屋」での修行、従事に始まる。2) 菅原に漆芸を教えた師匠は、森川奇秀である。3) 菅原は、1901年9月に東京美術学校漆工科に入学し、同校に3年以上在学したが、卒業はしていない。4) 菅原は師の辻村松華とともに1905年11月18日に横浜港を出発し、1905年12月26日にパリに到着した。5) 菅原とグレイ、デュナンの作品を比較した結果、漆芸技術だけでなく日本美術や文化の特性もが影響している可能性が見いだされた。

研究成果の概要(英文)：Japanese lacquer artist, Seizo Sugawara taught lacquer art to Eileen Gray and Jean Dunand, and influenced Modern Art of France. This study attempts to clarify his personal history correctly by means of visiting his family and referring to documents. He began to study in field at Kawaseya located in Sakata-City Yamagata Prefecture. Kawaseya was both a shop and a factory of furniture, administer by Ukichi Maruyama. Master of lacquer art were Kishu Morikawa. September, 1901, Sugawara was admitted to Tokyo School of Fine Arts, and continued his study of lacquer art over 3 years, but he didn't graduate. Sugawara departed the Port of Yokohama on November 18, 1905 with Shoka Tujimura, They arrived in Paris on December 26, 1905. As a result of comparing the works of Sugawara, Gray, and Dunant, It is suggested that Sugawara gives the influence not only on lacquer technique but also on the properties of Japanese art and culture.

研究分野：空間デザイン史

 キーワード：菅原精造 アイリーン・グレイ ジャン・デュナン 日本漆芸 アール・デコ E.1027 東京美術学校
圓山卯吉

1. 研究開始当初の背景

菅原精造 [1884-1937] は、20世紀初頭、アール・デコの作家として有名なアイリーン・グレイ [1878-1976] やジャン・デュナン [1877-1942] に初めて日本漆芸を教え、作品を共に創ったことでフランスの近代美術に多大な影響を与えた。

ところが、欧州ではこれまで菅原に関して断片的に記述されることはあっても、彼の修行および創作活動についてまとめられたものはない。欧州では、グレイとデュナン関連の文献にしばしば菅原が取り上げられたが、詳細説明は示されなかった。欧米のグレイとデュナン研究者やアール・デコ研究者にとって、菅原に対する関心が高まっているが、入手できる情報はほとんどなく、日本における調査とその報告が切望されている背景であった。

2. 研究の目的

本研究の目的とするところは、次の二つである。(1) 菅原の修行および創作活動の内容を明らかにすること (2) 菅原が欧州の漆芸家に与えた影響を考察し、その位置づけを明らかにすることである。

菅原の足跡を追うことで、日欧交流の知られざる側面が明らかになりうると考える。また、20世紀初頭の交流が、現代のグローバルズムにおける日本の漆芸文化・空間デザインの位置づけを問い直す契機となりうることも視野に入れ、研究目的とする。

3. 研究の方法

(1) 国内外において、菅原に関する資料を収集するとともに全作品を撮影、遺された手紙、写真、史料を複写し、作品リスト、データベースを作成して正確化を図る。

(2) 菅原が影響を与えた作家のうち、グレイとデュナンの作品が所蔵されているフランス、イギリス、アイルランドの美術館、ギャラリー、コレクターにコンタクトを取り、その作品を可能な限り撮影し、菅原の作品と意匠的に比較分析する。さらに、グレイが設計した住宅を調査し、菅原からの影響の展開を位置づける。

4. 研究成果

漆芸家・菅原精造について、日本・フランスの遺族および関係機関を調査した結果、菅原が日本漆芸を身に付けるために所属した組織と修行内容、その師匠など重要な史実が明らかとなった。それらを踏まえつつ、菅原作品とグレイ、デュナンの作品を比較し、双方の影響関係を探求した結果、デュナンに比べてグレイの作品群に、漆芸技術だけでなく、家具・木工技術、材料や顔料、日本美術と文化の特性までもが影響している可能性が見いだされた。さらに、グレイの住宅 E.1027 において、漆芸作品で培われた造形手法が、建築のデザイン手法に接続

していることがわかった。また、菅原は、ほかの日本人芸術家たちとともに、グレイの作品制作に携わったこともわかり、複数の日本人が連携してフランスの近代美術に影響を与えた可能性のあることが判明した。

(1) 渡仏までの菅原に関する調査と結果

菅原の漆芸修業や修学に関しては、これまで情報が錯綜していた。1937年の『アトリエ』誌における菅原の訃報記事には「東京美術学校漆芸科の出身」とある。しかし、筆者は東京藝術大学に残る当時の卒業生名簿を調べたが、菅原の名は載っていないことがわかった。次に『東京美術学校一覽 從明治三十五年至明治三十六年』において、在学状況を調べたところ、漆工選科第二年に在籍する者として「菅原精造平」の記載があり、また、『東京美術学校一覽 從明治三十六年至明治三十七年』にも、漆工選科三年に菅原の名前が記載されていることがわかった。しかし、その後の一覽には、記載がない。以上が公共図書館で調べうる限界であった。

その後、東京藝術大学の協力を得た結果、当時の教務資料から、菅原の修学年や入学に際する保証人が明らかとなった。具体的には、東京藝術大学の記録文書を教育史料編纂室の吉田千鶴子氏に調べていただいたところ、在学証明書と各科級別現員表から、次の新事実が判明した。

「自明治廿三年至明治四十三年 各科級別現員表 東京美術学校」の「明治三十四年十一月十五日調」に「漆工科撰科第一年 山形平 菅原精造」とあり、「明治三十五年十月末調」に「漆工科撰科第二年、山形士 [ママ] 菅原精造」とあり、「明治三十六年十月末調」に「漆工科撰科第三年 山形平 菅原精造」と記載されていた。そして、「明治三十六年十月末調」に再び、「漆工科撰科第三年 山形平 菅原精造」とあり、「明治三十八年十月末調」には名前がない。よって、当時の入学は、原則として九月であったことから、少なくとも漆工科で三年以上修行したことが分かる。もう一つの記録文書として菅原が東京美術学校に入学が許可された際の「明治三十四年九月第拾四回入学生在学証書 教務掛」があり、第三十五号の在学証書として明治三十四年九月十一日付で菅原精造の名前が印とともに記されている。また、副保証人として「漆器職元師匠 平民」の「森川奇秀」の名が記載されていた。以上のことから、菅原は、明治34

(1901)年9月に東京美術学校漆工科に入学し、明治38(1905)年11月に渡仏し、同校に3年以上在学したが、卒業はしていないことがわかった。また、東京美術学校入学前の師匠の一人が森川奇秀であることがわかった。

ところで、東京美術学校以前の菅原の漆芸に関する修行についてもこれまで判然と

しなかった。筆者は「精造が菅原家の養子になった頃、義理の父親は仏壇商（かわせ屋）に勤めていた。あるいは、精造が漆芸に進んだ切掛は仏壇の漆塗りと関係があるかもしれないが、正確なことは遺族にも定かではない。」と、これまでの論文「漆芸家、菅原精造の履歴に関する調査・資料」に記述してきた。その後、山形県の酒田市資料館および光丘文庫に赴き、渡仏前の菅原の修行に関する調査を行った。この調査によって、「カワセ屋」は仏壇以外にも様々な家具製作を扱う組織の屋号であったことが判明した。「カワセ屋」とはどのような商店であるかについては、酒田市資料館が所蔵する、昭和52年4月発行の伊藤珍三郎による『酒田の名工名匠』に興味深い記述が多くあった。伊藤によると、「カワセ屋」の主人は圓山（円山）卯吉であり次のように詳述している。

「圓山卯吉は、明治・大正期の酒田の木工・漆工の発展史の一つの中心をなした存在で、特産によって地域を富ましめよう願いから、木工品や漆工品の品質の改良や意匠の改善をくわだてた具眼のひとであった。自身は工人ではなかったが、目先の明るい好事家として地域の特産の発展につくした。新潟や会津若松や静岡等の先進地から教師を招いては、自家工場の徒弟に木工や漆工の仕事を訓練したりしたが、そういうことに一生を賭けた人で、その方面には随分資材を投じたりもしたようである。」

また、昭和61年に発行された『庄内人名辞典』には以下のように記されている。

「円山〔ママ〕卯吉（まるやまうきち）文久1（1861）12.12～大正13（1924）10.23 漆木工業者。河瀬屋を屋号とし酒田上仲町で漆器木工を業とする。早くより越後の村上・高田や静岡・会津等の先進地から職人を招いて徒弟に漆および木工の技を学ばせた。…また明治末期には濟世〔ママ〕学校を経営して貧困子弟に木工徒弟教育を施し、のちには多量の木工品を北海道に輸出する。大正12年（1923）門人らにより海晏寺に寿碑がたてられた。享年64。」

上記から「カワセ屋」の主人の圓山（円山）は、「自家工場の徒弟に木工や漆工の仕事を訓練したりした」と、「明治末期には濟世〔ママ〕学校を経営して貧困子弟に木工徒弟教育を施し」たことがわかる。これらのことから、菅原が「カワセ屋」または濟世学校において漆芸と木工を身につけ、家具の製作にかかわりながら修行を積んでいた可能性が明らかとなった。

さらに、上記の圓山の寿碑は、研究協力者の熱田充克が山形県酒田市の海晏寺境内に見つけ出し、ご住職の協力を得て碑を確認することができた。石碑の表には「報



図1 海晏寺 圓山卯吉の寿碑

恩 円山卯吉翁寿碑」とあり、裏には、建立に関係した人物計33名の職業と名前が彫り込まれており、「一九二三年（大正一二）四月三日建立」とある。その中に「漆工 菅原精造」と刻まれていた。

菅原は、遠くフランスからこの建立に協力したわけである。このことから、菅原が圓山に極めて近い徒弟であることが明らかであるので、「カワセ屋」で修行したと確定できる。菅原の出生地である酒田には、遺族に送られた写真、ハガキ以外に菅原の足跡を示すものがまだ見つからない。この石碑は極めて貴重な史料である。

以上、これまで海外のグレイ、デュナン、アール・デコ関係の研究者が切望しても、定かでなかった菅原の修行内容とその師匠について新しい事実が判明した。

（2）渡仏後の菅原に関する調査と結果

菅原とともにフランスへ渡った師の辻村延太郎は松華を雅号とする漆芸家であり、当時、東京美術学校漆工科の教授であった。彼は1905年、東京美術学校の校友会月報にパリへの渡仏紀行を第四巻六号、七号、九号と三回にわたって寄せており、その冒頭は次のように始まる。「時は是、明治三十八年十一月十八日、横浜埠頭を解纜する仏国郵便船ツーランに、便乗して、さして、行方は巴里の都・・・」。そして九号には、出港後約1ヶ月を経て、ようやく、12月24日にフランスのマルセイユ港に着き、25日上陸、26日にパリへ到着する様子が書かれている。この辻村の紀行文から下記の事実が明らかとなった。菅原の渡仏年月日は1905年11月18日、パリに到着したのは、1905年12月26日である。



図2 アイルランド国立博物館 青光粉

筆者は、フランスへ赴き、菅原がグレイとともに作品を制作したとされる工房のあった現地を確認し、撮影した。また、アイルランドへ赴き、グレイが菅原を通じて購入していた漆、道具などを調査した。アイルランド国立博物館のグレイに関する収蔵品の中に漆芸に使用する顔料の箱があり、

帰国後、撮影したデータ調査から、箱に書かれた文字は判読しにくいものの「青光粉」「福島県喜多方町」「荒川特製」と予想して、福島県喜多方町現地を調査した。その結果、漆芸品店の北見八郎商店の展示物の中に、喜多方町の漆関係の工房や店があった場所を示す手描きの地図があり、その中に筆者は「荒川」の家が描かれていることに気づいた。これは近年、経営者の北見駿次氏が描いたものであることがわかり、北見氏の協力を得て、「荒川」家の遺族に連絡がつき、聞き取りを行ったところ、上記の箱は、喜多方の漆器工人「荒川耕造」による精製品「青光粉」であることが判明した。さらなる調査が必要であるが、菅原がグレイやデュナンのために、日本各地から漆芸作品の制作材料を入手していたことがわかった。

イギリスにおいては、ピクトリア&アルバート美術館においてグレイの作品を撮影するとともに、グレイが菅原に出会うきっかけとなった可能性のあるロンドンのソーホー地区を調査した。また、フランス、パリの装飾芸術美術館において、グレイおよびデュナンの屏風をはじめとする家具作品を調査し、データシートを作成した。これらをもとに、グレイとデュナンの漆芸作品の比較研究を行った。その結果、グレイとデュナンの作品に、日本美術と文化の特性までもが影響している可能性が見いだされ、その傾向は、デュナンよりもグレイの作品に顕著であることが明らかとなった。また、前述のように、菅原は、山形において、漆芸だけでなく木工や家具の製作に携わっている。この経歴によって、グレイとデュナンの家具や屏風の制作に協働して従事しやすかったと考えられる。特に、グレイは、数多くの家具をデザインし制



図3 フランス
菅原精造の墓碑

作している。漆芸だけでなく、机や椅子の制作まで、菅原がグレイに教えた可能性もある。

さらに、菅原が晩年を過ごした場所を調査し、シャンティイのロスチャイルド家に関する資料を入手した。また、近郊にある菅原の墓地と彼の墓碑を確認し、関係者にインタビューを行った。墓碑には、名前、生没年とともに「SCULPTEUR-LAQUEUR (彫刻家-漆芸家)」と刻まれており、菅原が、漆芸家としてだけでなく、彫刻家を自認していたことがわかった。この事実は、グレイやデュナンに教え協働した内容が、漆塗りだけでなく立体造形に及ぶことを裏付けるものである。

フランスでは、ロクブリュヌ、カップマルタンのグレイの住宅E.1027にも赴き、撮影し調査した。そこでは、菅原とともに制作した漆塗り屏風における日本的な要素が展開して見いだされ、また、その日本の特性と当時の時間概念を空間化した美術思潮、キュビズムとをグレイが融合させて斬新な空間デザインが創発された可能性を見出すに至った。



図4 フランス 住宅E.1027

ところで、菅原は1906年ごろグレイに出会い、共同で工房を開設して数々の作品を制作した。その後、徐々に増えた制作依頼のためにグレイは他の日本人とも一緒に仕事をするようになる。グレイの評伝を著したアダムは、次のように書いている。

「Sugawara を通してグレイはパリにいる他の漆職人 Inagaki と Ousouda に出会った」
これまでここで漆職人とされる日本人 Ousouda は、「オオスダ」と訳されており、

どのような人物か全くわかっていなかったが、国内において、研究協力者の熱田充克の協力を得て調査した結果、漆職人ではなく画家の碓田勝巳〔1905-1988〕であることが判明した。碓田は関西美術学院で絵画を学び、1924年に渡英、1926年にフランスに渡り、展覧会に絵画を出品し、1934年に帰国している。碓田は少なくとも1929年まではグレイの工房で漆塗りの仕事をした可能性が大きい。また、グレイの展覧会カタログにもあるように、Inagakiは稲垣吉蔵〔1876-1951〕であり、彼もまた漆職人ではなく東京美術学校で彫刻を学び1906年に渡仏、ロダンの助手となって生涯をパリで過ごした人物である。1922年、空間すべてを漆塗りで仕上げたグレイの代表作「ロタ通りのアパルトマン」改装は菅原と稲垣が制作した。これらのことから、菅原がほかの日本人美術家と連携して、フランスのール・デコを代表する作品群を生み出していた事がわかった。

(3) 研究成果の意義と今後の展望

以上、菅原が初めて伝えた日本漆芸が、どのような状況でどのような影響を与えたかを調査し明らかにした成果を示した。

この研究を通して明らかになった最も重要な成果は、菅原がフランスの近代美術から影響を受けただけの人物ではなく、日本の芸術と文化を、フランスを代表する芸術家たちに長年にわたり丁寧に教え、共に作品をつくった人物であることがわかったことである。漆や顔料などの材料を日本から取り寄せ、漆芸だけでなく屏風や家具に関する木工技術も教え、それによって、1920年代を代表する近代建築にまで影響を及ぼした功績は、改めて評価されるべきものと考えられる。明治時代に渡仏し彼の地の美術思潮や技法の影響を受けて、帰国後、華々しく活躍した芸術家たちは幾人もいるが、しかし逆に、欧州人と協働しつつ日本美術の伝統技法や思想を伝え、欧州人に影響を与えた日本人は極めて珍しいからである。菅原のフランスの近代美術への影響は、明治時代の日仏が一方向でなく双方向に影響していたことを再認識できる事例として位置づけることができると考える。

また、この研究を通して、菅原に協力した渡仏美術家たちがグレイの斬新な作品の制作を可能にし、ひいては、欧州の美術家たちに影響を与えた可能性のあることに気づいた。菅原周辺の美術家たちの足跡を追うことで、日欧美術交流のさらに新たな側面が明らかになりうると考える。今後は、日本人美術家とグレイの協働内容を早急に調査するとともに、その協働から影響を受けた欧州の作家の資料収集、調査をおこな

い、その位置づけを明らかにしたいと考えている。

〈引用文献〉

- ①川上 比奈子、菅原精造の履歴に関する調査・資料、夙川学院短期大学研究紀要、第34号、2006、33-54
- ②伊藤珍太郎、酒田の名工名匠、酒田の名工名匠刊行会、1977
- ③庄内人名辞典刊行会、庄内人名辞典、1986
- ④辻村松華、渡仏紀行、東京美術学校校友会月報、第4巻、第6、7、9号、東京美術学校、1906
- ⑤Adam, P., *Eileen Gray Architect/Designer*, Harry n. Abrams, 1987

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計2件)

- ①川上比奈子、漆芸家、菅原精造がアイリーン・グレイの家具・インテリア・建築に及ぼした影響、デザイン史学研究会第14回シンポジウム、2016年7月9日(土)、神戸大学(兵庫県神戸市)
- ②川上比奈子、藤岡司、アイリーン・グレイの住宅E.1027における模式図と動線図の関係(1)、日本建築学会、2013年9月1日(日)、北海道大学(北海道札幌市)日本建築学会大会学術講演梗概集、2013、pp.819-820

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川上 比奈子 (Kawakami, Hinako)

摂南大学・理工学部・教授

研究者番号：90535121